

東邦大学学術リポジトリ



OPAC

東邦大学メディアセンター

| | |
|-----------|--|
| タイトル | Social anxiety and risk factors in patients with schizophrenia: Relationship with duration of untreated psychosis |
| 別タイトル | 統合失調症患者における社交不安とリスク因子 精神病未治療期間との 関連 |
| 作成者(著者) | 相川, さやか |
| 公開者 | 東邦大学 |
| 発行日 | 2019.02.21 |
| 掲載情報 | 東邦大学大学院医学研究科 博士論文 内容の要旨及び審査結果の要旨. 64. |
| 資料種別 | 学位論文 |
| 内容記述 | 主査: 桂川修一 / タイトル: Social anxiety and risk factors in patients with schizophrenia: Relationship with duration of untreated psychosis / 著 者: Sayaka Aikawa, Hiroyuki Kobayashi, Takahiro Nemoto, Satoshi Matsuo, Yo Wada, Noriyuki Mamiya, Taiju Yamaguchi, Naoyuki Katagiri, Naohisa Tsujino, Masafumi Mizuno / 掲載誌: Psychiatry Research / 巻号 ・発行年等: 263:94 100, 2018 |
| 著者版フラグ | none |
| 報告番号 | 32661乙第2901号 |
| 学位記番号 | 乙第2746号 |
| 学位授与年月日 | 2019.02.21 |
| 学位授与機関 | 東邦大学 |
| メタデータのURL | https://mylibrary.toho u.ac.jp/webopac/TD98014547 |

博士學位論文

論文内容の要旨

および

論文審査の結果の要旨

東邦大学

相川さやかより学位申請のため提出した論文の要旨

学位番号乙第 2746 号

学位申請者 : 相 川 さ や か
あ い かわ さ や か

学位審査論文: Social anxiety and risk factors in patients with schizophrenia: Relationship with duration of untreated psychosis

(統合失調症患者における社交不安とリスク因子 -精神病未治療期間との関連-)

著 者 : Sayaka Aikawa, Hiroyuki Kobayashi, Takahiro Nemoto, Satoshi Matsuo, Yo Wada, Noriyuki Mamiya, Taiju Yamaguchi, Naoyuki Katagiri, Naohisa Tsujino, Masafumi Mizuno

公 表 誌 : Psychiatry Research 263 : 94 - 100, 2018

論文内容の要旨 :

統合失調症患者の治療目標は、他者とのより良い関係性を築いて社会参加することを考慮したとき、精神症状や認知機能障害のみならず、社会機能障害の改善がより重要である。しかしながら統合失調症患者の多くは、他者との関係性に関する不安(社交不安)を感じている。先行研究では、寛解した統合失調症の外来患者において、主観的QOLの低さがその後の社交不安症状に関連することが見出された。一方、近年においては精神病未治療期間(duration of untreated psychosis: DUP)が、患者の機能的転帰を決定する重要な因子だと考えられている。本研究の目的は、社交不安症状をもつ統合失調症患者の疫学的および臨床的な特徴と、社交不安症状に関連する因子を明らかにすることであり、社会認知、社会機能、QOLならびに発症年齢、罹病期間やDUPなどの臨床的な指標が、社交不安症状の有無や重症度を予測する因子になり得ると仮定した。

東邦大学医療センター大森病院精神神経科にて 207 名の統合失調症の外来患者について、Mini International Psychiatric Interview (MINI) を用いて社交不安障害の診断を行った。社交不安症状の重症度は、Liebowitz Social Anxiety Scale (LSAS) スコアを使用して評価した。LSAS は 24 項目からなる評価法で、LSAS スコア 30 が臨床水準のカットオフ値である。精神症状(陽性・陰性症状、抑うつ症状)、認知機能(社会認知、表情認知、神経認知)、社会機能(日常生活の機能障害、主観的ウェルビー

ーイング)、QOLなどを、それぞれの検査項目により評価した。そして、①MINIで社交不安障害の診断基準を満たす群と満たさない群の間で、②LSASスコア30以上の群とLSASスコア30未満の群の間で、統計学および臨床的な変数の比較を行った。連続変数の比較にはt検定を用い、カテゴリ変数の比較にはカイ二乗検定を用いた。次に、スピアマンの相関係数を用いて、LSASスコアと人口統計学および臨床的な変数との相関を調べた。最後に、LSASスコアを従属変数として、精神症状などの臨床的な変数および性別、年齢、発症年齢、罹病期間、DUPを予測変数として用いて、ステップワイズ重回帰分析を行った。

207名のうち、MINIによると30名(14.5%)が社交不安障害の診断基準を満たし、LSASでは109名(52.7%)がLSASスコア30以上を示した。MINIにおいて社交不安障害を合併する群では、合併しない群と比較して、LSASスコア、精神症状、抑うつ症状、日常生活における機能障害が有意に高く、社会機能、主観的ウェルビーイング、QOLが有意に低かった。LSASスコア30以上の群と30未満の群の比較でも、同じ変数において同様の差異がみられた。LSASは、発症年齢、DUP、精神症状、社会機能およびQOLとの間に相関がみられた。重回帰分析では、社会機能の低下、性別(女性)、若年発症、DUPの長期化が、LSASに関与していた。

考察として、社交不安症状は精神症状、社会機能、QOLと相関があることが分かった一方で、社会認知や認知機能との相関はみられなかった。これは、統合失調症患者では認知機能の障害が症状の重症度とは関連していないと解釈したが、さらなる検討を要する。

社会機能、性別、発症年齢およびDUPは、社交不安症状を予測する因子となることが示唆された。社交不安症状をとらない、他者との関わりを恐れたり社会参加を回避したりすると、社会機能が低下し精神病への介入が遅れ、DUPが長くなると考えられる。社交不安障害と性差について先行研究では、女性のほうが人前で話したりする際に男性よりも恐怖を感じると報告されており、統合失調症患者の間でも同じ傾向がみられることが明らかになった。また、統合失調症の発症年齢が若いと、社会的な技能を身に付ける機会が少ないため、若年発症がLSASに関与していたのであろう。

207名中、MINIでは30名(14.5%)が社交不安障害の診断を満たしたが、LSASではより多くの109名(52.7%)がLSASスコア30以上を示したことは、LSASが「恐怖」と「回避」に関する24項目を各4段階で評価していることに対して、MINIは恐怖が社会生活に支障を来しているのかを問う簡易的な構造化面接であるため、社交不安障害を過小評価している可能性も考えられた。

結論として、DUPの長い統合失調症患者の治療をおこなう場合は、社交不安症状の評価も再考すべきであり、統合失調症患者の回復のためには、早期から社交不安症状への適切な介入を行うことが不可欠と思われる。

1. 学位審査の要旨および担当者

| | | |
|---------------|-----|-----------|
| 学位番号乙第 2746 号 | 氏 名 | 相 川 さ や か |
| 学位審査担当者 | 主 査 | 桂 川 修 一 |
| | 副 査 | 端 詰 勝 敬 |
| | 副 査 | 西 脇 祐 司 |
| | 副 査 | 中 野 弘 一 |
| | 副 査 | 長 谷 川 友 紀 |

学位審査論文の審査結果の要旨 :

統合失調症の治療目標として、精神症状や認知機能障害のみならず社会機能障害の改善がより重要とされている。そのなかで社交不安症状は統合失調症患者に合併する病態としてしばしば報告されている。本研究は社交不安症状をもつ統合失調症患者の疫学的・臨床的特徴と社交不安症状に関連する因子を明らかにすることを目的に、社会認知をはじめとするさまざまな臨床的な指標が社会不安症状の有無や重症度を予測する因子になり得ると仮定し、調査した。統合失調症の患者 207 名について社交不安症状、精神症状、社会認知、認知機能、社会機能、QOL について評価した。社交不安を予測するモデルを確定するため精神疾患簡易構造化面接 (MINI) と Liebowitz Social Anxiety Scale (LSAS) スコアを用いて統計学的および臨床的な変数との相関を調べ、ステップワイズ重回帰分析を行った。207 名の患者のうち、30 名 (14.5%) が社交不安障害の基準に合致し、109 名 (52.7%) は社交不安症状が臨床レベルに達していることを示唆する平均 LSAS スコアが 30 以上を示した。社交不安症状は精神症状、社会機能、QOL と有意に相関が認められたが、社会認知や認知機能との相関は認められなかった。重回帰分析では社会機能、性別、発症年齢、精神病未治療期間 (duration of untreated psychosis: DUP) を予測因子として特定したが、それらは LSAS スコアと密接に関連していた。以上から社交不安症状は、統合失調症の外来患者に高頻度に認められ、社会的認知障害より社会機能と DUP と密接に関連すると結論された。学位審査は平成 30 年 12 月 25 日、審査委員全員が出席し開催された。はじめに相川氏が統合失調症の治療目標と社交不安障害と統合失調症の関係について概説し、続いて本研究の目的を解説した。主要評価項目と副次的評価項目を説明し、それらを用いた解析手法を示して本研究を実施した過程を丁寧に説明して質疑応答となった。審査委員からは、LSAS は年齢によって得点が変わらないか、MINI と LSAS の測定で該当者の数が異なる理由、LSAS と DUP はどちらが先に生じるのか、社会機能スケールの低下は LSAS の関連因子ではないかといった点について活発に質疑が交わされたが、相川氏はすべての質問に丁寧に回答した。質疑応答の中で相川氏が統合失調症の診断治療について深い知識を有することが確認できた。本研究は統合失調症の回復のために早期介入を行う必要があり、その上で社交不安症状への適切な介入が不可欠であるという新奇性のある有意義な研究であり、学位授与に値するものと審査委員全員が判断した。